

在日中国人留学生の異文化適応のための シナリオ型自習教材の検討

孔辰^{*1}, 古川 宏^{*2}

*1 筑波大学大学院システム情報工学研究科リスク工学専攻, *2 筑波大学システム情報系

Scenario-based Teaching Materials for Acculturation Adaptation in Chinese Students Living in Japan

Kong Chen^{*1}, Hiroshi Furukawa^{*2}

*1Department of Risk Engineering, Graduate School of Systems and Information
Engineering, University of Tsukuba

*2 Faculty of Engineering, Information and System, University of Tsukuba

With the increase of foreign students in Japan, it has also become a topic for foreign students to adapt to Japanese social life. The target of this study is Chinese students in Japan, focus on their difficulties in getting in touch with and communicating with Japanese. The main methods of learning and supporting are to make use of the contact situations to construct an environment of intercultural contact, and to use Goal-Based Scenario Theory to simulate the experience difficulties and obtain solutions to the problems. In order to make learners to get better understand the difficulty of intercultural communication, this study also proposed the model of the process of words and deeds in contact with people to explain and express the reasons for the difficulty of intercultural communication.

キーワード:異文化適応, 接触場面, GBS 理論, 言動生起, 学習支援, 中国人留学生

1. はじめに

近年, 来日留学生の人数は増え続けている. 独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) の「外国人留学生在籍状況調査結果」では, 平成 28 年度の外国人留学生数は 239, 287 人に達したと報告されている[1]. その中に, 中国人留学生は 41%であった (図 1).

留学生の増加に伴い, 留学生の異文化適応に関する問題が課題となっている. 日常生活上の困難に焦点を当て, その実態を明らかにする多くの研究が行われてきた. 村田らは, 中国人留学生が日本の生活において「日本人との人間関係」, 「日本人の考え方・価値観」の領域になれることが最も時間を必要とすると報告している[2]. さらに, 陳, 高田谷らは中国人留学生が「学業」, 「語学力」, 「対人関係」に関する生活ストレスに

「苦痛や不安」を感じていることを明らかにした[3].

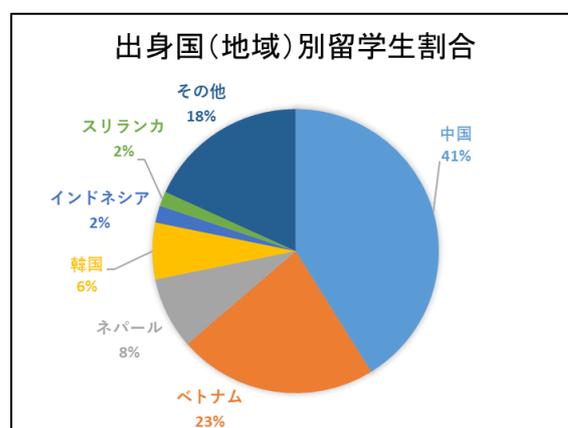


図 1 出身国 (地域) 別留学生の割合[2]

本研究の目的は在日留学生の中でも最多である中国人留学生を対象とし, 異文化適応の知識を獲得させる

ための自習学習支援法を提案することである。従来の異文化学習教材に比べ、この学習支援法では中国人留学生の対人関係上の困難に注目し、具体的な異文化接触環境を構築する。学習者は異文化接触環境において異文化トラブルを疑似体験し、日本人の考え方を理解し、トラブルを回避する対策を身に着けることを可能とする。

2. 関連研究

2.1 節では、異文化教育における「異文化適応」の概念を述べた関連研究を紹介する。2.2 節では、ICT (Information and Communication Technology) 技術を用いた異文化トレーニングに関する研究を紹介する。2.3 節では異文化適応の問題として留学生の対人行動に関わる問題に関する研究を紹介し、2.4 節では異文化環境を構築するための「接触場面」の手法を紹介する。最後に 2.5 節では、それらの研究と本研究の関連を説明する。

2.1 異文化適応の概念

留学生が問題なく生活していくには、日本社会に溶け込み、異文化に適応することが重要である。異文化適応の概念について、山岸は、「異文化環境下で仕事や勉学の目標を達成し、文化的・言語的背景の異なる人々と好ましい関係をもつことで、個人にとって意味のある生活が可能になる」と述べている[4]。

2.2 ICT を用いた異文化トレーニング

加藤らは日本人学生に向け ICT を用いた異文化トレーニング教育支援システムを提案していた[5]。彼らは既存の異文化トレーニングに関わる文献の調査し、価値観・偏見・自文化中心主義などのキーワードに関する事例を整理した。この研究では学習項目を「異文化について学ぶ」、「相互理解を深めるためのコミュニケーションについて学ぶ」、「異文化コミュニケーションスキルを磨く」という 3 つの項目で各事例を分類し、関連する詳細な解説を作成した。このシステムでは、学習者が各事例に関する問題を解き、解説を読み進める形式としていた。設問形式は、クイズ形式を中心として他に記述形式・穴埋め形式が設けられていた。学習中、他者の意見や回答内容を閲覧する機能と意見交

換機能も存在していた。

開発したシステムの評価のため、大学生らを対象に実験を行った。結果として、このシステムは異文化理解の意欲向上と異文化理解を深めることにおいて有用であった。このシステムでは、主な問題点として以下の 2 点を指摘していた。

① 学習内容について

異文化コミュニケーション学上の抽象的な概念から始めるおり、一般の学習者には難易度が高い。文化的影響の身近な話題から学習内容を作成すべきである。

② 学習方法について

問題文や解説文について、専門性・難易度の高さ、文章の長さを指摘する意見が寄せられた。コンピューター画面で学ぶ上で、適切な提示法を利用すべきである。

2.3 在日留学生の異文化適応上の困難

田中らは在日留学生の異文化適応を対人関係形成の面から分析した、留学生が異文化環境において挨拶、主張、遠慮、社交辞令などの対人行動を誤った場合に起きた問題を調査した。対人行動上の困難さを以下の 6 つの領域に分類した[6]。

- ① 表現の間接性：日本人ははっきり断らない、日本人の遠慮の意図がつかみにくい。
- ② 社会通念：日本での社会通念が難解で、社交辞令を誤解していた。
- ③ 自己表現の抑制：開放的な表現を好む文化圏から来た留学生の開放的態度と日本人の抑制の効いた態度に差がある。
- ④ 異性との対応：性規範が異なる文化圏から来た留学生を困惑させる。
- ⑤ 外国人扱い：外国人扱いが悩ましく、日本人が外国人を特別視することがある。
- ⑥ 集団行動：日本人の集団行動のとり方の要領がつかめず、必然性が分らない。

2.4 異文化接触場面に関する研究

「接触場面」とは、文化の背景が異なる日本人と外国人がやりとりをする場面である。日本語教育や異文化教育などの領域への応用が多い[7]。

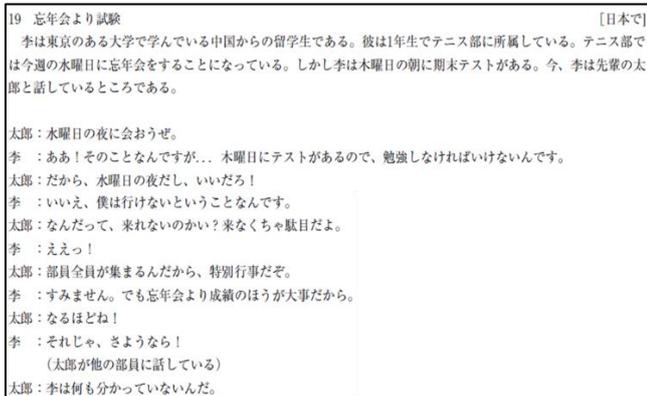


図 2 接触場面の例[8]

横林、羅らは日本と中国の大学生を対象として日中接触場面におけるコミュニケーション上の問題点を明らかにするため、中国人大学生を対象に異文化による問題場面での双方の言動を調査した[8]。彼らは日本人と中国人の接触状況において言語行動と非言語行動に注目し、簡単な対話形式で具体的な接触場面を作成した(図2)。具体的な接触場面を示すことで、登場する異文化出身者の言語・非言語行動に対する問題点を発見することが容易になる。

2.5 本研究との関連

加藤らの研究では異文化理解の概念に注目し、関連する事例と解説を提示する学習システムを開発した。評価実験の結果より、異文化理解の意欲向上と異文化理解を深めることにおいて有用性を検証したが、①異文化コミュニケーション学上の概念を用いたために学習内容の難易度が高い、②専門性・難易度が高くて問題や長い解説文章を用いた学習方法が不適切であるという2つの問題点が指摘された。本研究では、学習内容と学習方法について検討し、新たな学習支援法を提案する。

学習内容について、日本での留学生の異文化適応の問題は、さまざまな側面からのアプローチが提案されている。本研究の学習内容は、中国人留学生が多くの困難を抱えている領域である対人関係に注目する。学習者の理解しやすさを考慮し、中国人留学生が経験した異文化事例を用いて学習支援内容を検討する。また、対人関係上の問題点を明らかにするため、本研究は田中ら提案した「在日留学生の対人行動上の困難」の分類方法を利用し、具体的な異文化事例を分類する。

本研究の学習方法について、文章型の解説を使わず、

異文化接触環境のシナリオを用いて解説する。学習者は異文化接触環境において異文化トラブルを疑似体験し、トラブルの状況と言語や行動に対する認識が容易になる。異文化接触場面に関する研究により「接触場面」の手法を用いることで異文化接触環境の構築において有用である。

3. 提案する学習支援法の設計

本研究の目的を達成するため、以下の3つの小目的を立て、実現していく。

- ① 中国人留学生の対人関係上の具体的な困難事例を調査し、調査結果を分析して学習内容を確定する。調査方法としてアンケートを利用する。分析方法としては、異文化適応の困難に関する既存の分類方法を利用する。
- ② 異文化接触環境の作り出す方法と異文化トラブルの疑似体験の方法を提案する。実現方法として、異文化教育の手法である「接触場面」の手法とコンピューターベースの GBS 理論を利用する。
- ③ 中国人留学生に対人行動に関する日本人の考え方を理解させ、トラブルを回避する対策を理解させる提示法を検討する。手法では言動を生起する過程のモデルを提案する。

3.1 アンケート調査

在日中国人留学生が異文化と接触する際の実態を把握し、彼らが経験した具体的な異文化事例を収集するため、アンケート調査を実施した。

3.1.1 調査の実施

2016年11月に日本における中国人留学生を対象とし、アンケート調査を実施した。結果として、123部を回収した(回収率:82%)。

異文化適応の重要性を明らかにするため、「日本の生活に適応するための大切なこと」、「文化の違いが生活に影響を与えること」など質問を設定した。また、異文化適応のための教材の必要性を明らかにするため、「異文化トラブルが起きた原因」と「異文化知識を勉強する手段」に関する質問を設定した。さらに、今回の調査のメインとして「経験した具体的な異文化事例」の記述式質問も設定した。

3.1.2 調査の結果

図3はアンケートの問の「日本の生活に適応するための大切なこと」の結果である。縦軸が人数で横軸が項目である。集計結果より、71.5%の参加者は日本の生活に適応するための大切なことは異文化の適応と考えていた。図4はアンケートの問の「文化の違いが生活に影響を与えること」の結果であり、48%の人は異文化が生活に影響があると考えていた。図3,4の結果から文化の違いは留学生活に影響が大きく、日本での生活を慣れるために異文化適応は重要である。

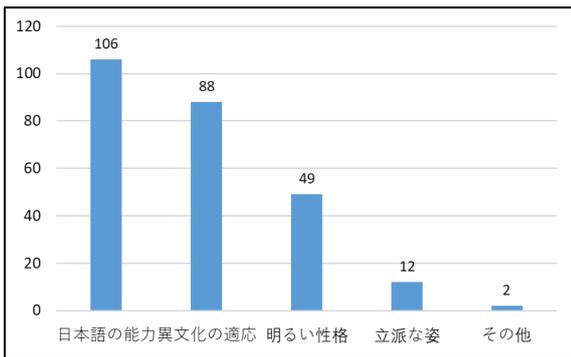


図3 日本の生活に適応するための大切なこと

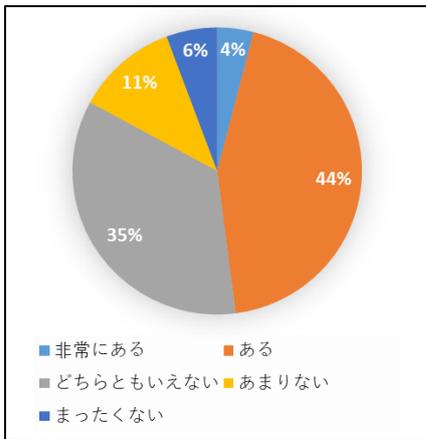


図4 文化の違いが生活に影響を与えること

3.1.3 収集した事例の分類

アンケートにおける「経験した異文化トラブル・事例」の調査では106件の回答を得た。以下に例を示す。

- 事例1：食事を誘ったときに日本人ははっきり断らずに「今日はちょっと…」と言って誘いを断っていた。日本人は言葉を最後まで言わずに相手の気持ちや意思を理解していることに驚いた。
- 事例2：日本の電車での携帯電話はマナー違反である。乗客が携帯電話をマナーモードに設定することや小声で話していることに驚いた。

収集した事例から日常生活中に中国と日本文化の違いが浮き彫りになった。本研究では中国人留学生在が日本での対人行動に関わる異文化トラブルに注目しているので、既存の「在日留学生による日本での対人行動上の困難」の分類方法を用いて対人行動に関わるトラブル（計74件）を分類した（表1）。

表1 収集した事例の分類

項目	説明	件数
表現の間接性	日本人ははっきり断らない。日本人の遠慮の意図がつかみにくい。	12件
社会通念	日本での社会通念が難解で、社交辞令を誤解していた。	56件
集団行動	日本人の集団行動のとり方の要領がつかめず、必然性が分らない。	5件
自己表現の抑制	開放的な表現を好む文化圏から来た留学生の開放的態度と日本人の抑制の効いた態度に差がある。	1件
異性との対応	性規範が異なる文化圏から来た留学生を困惑させる。	0件
外国人扱い	外国人扱いが悩ましく、日本人が外国人を特別視することがある。	0件

他の32件の事例、例えば寿司、醤油ラーメンなど日本特有な食べ物・食べ方、車が左側に通行など、対人行動との関係ないので本研究の学習内容に考慮に入れない。

3.1.4 学習内容の確定

分類の結果によると、今回の調査対象とした中国人留学生の対人行動上のトラブルは「表現の間接性」、「社会通念」、「集団行動」3つの項目に集中している。一方、「自己表現の抑制」、「異性との対応」、「外国人扱い」に関する事例が少ない。これは、田中らの研究では、在日留学生全体を対象としているためと考える。すなわち、欧米出身の留学生に対し、東アジア圏出身の中

国人留学生と日本人とでは、「自己表現の抑制」、「異性との対応」、「外国人扱い」に関する文化の差が小さいと考えられる。

例えば「自己表現の抑制」について、田中らの分類によれば、「抑制の効いたつつましい自己表現」、「まじめで禁欲的な態度」、「人付き合いの屈託のなさ」など日本人の表現を指摘しているが、中国でも儒家思想は自己を控えることを美德としている。論語により孔子が「克己復礼」を提唱した（自己を抑えて礼儀を行うこと）。また、「嚴於律己」（自分に厳しい）に関する美德もある。

本研究では、学習の対象領域として、中国人留学生にとってトラブルが多発する「表現の間接性」、「社会通念」、「集団行動」3つの項目のみとした。「自己表現の抑制」、「異性との対応」、「外国人扱い」に関する内容は、本研究では対象外とする。

3.2 接触場面の構築

異文化接触環境を作り出すため接触場面の構築方法を検討し構築を行う。収集した事例を参考とし、本研究の接触場面の構成要素を以下の5つとした。

- 場面のテーマ：接触場面に対応する対人行動上の困難さの分類領域と領域内の下位項目を提示している。
- 参加者：接触場面における会話や行動の主体。本研究では参加者は中国人留学生と日本人を設定する。また、参加者の地位格差や親疎関係等の情報を提示する。
- 概要：接触の場合、場所と時間。また、接触場面における会話や行動の要点。
- 言語行動・非言語行動：接触場面における参加者の具体的な言語・動作表現。
- 行動の結果：参加者言語・動作表現から最終の状態を導き出すこと。

3つの学習項目に応じて代表的な接触場面、計14場面を設計した。「表現の間接性」における「婉曲的なお断り」の学習項目における1例では、「誘い・依頼を断る」に関する事例を参考とし、図5のように接触場面を構築した。収集した事例によると、日本人の表現の間接性について、申し出を断わる場合に、日本人は直接的な表現をできるだけ避けようとする傾向がある。

接触場面の設計上、まず参加者を中国人留学生と日本人とし、身近な話題として食事を誘う場面とする。また、異文化トラブルを表現するため、日本人の婉曲的な断りに対し中国人留学生が困惑してしまうシナリオを設計する。

- 事例：表現の間接性（婉曲的なお断り）
 - 食事を誘ったときに日本人ははっきり断らずに「今日はちょっと…」と言うだけで相手に自分の気持ちや意思を了解してもらい、「都合が悪いんです」あるいは「早く帰りたいんです」が省略されていると思われる。
 - 日本人は直接に不満を示さないです。誘ったときに、相手は行きたくないけど、直接に「行かない」ということを言えないでしょう。その代わりに「その日はちょっと…」ような「遠まわし」を用いられる。

テーマ	表現の間接性（間接的な拒否、デリカシー）
参加者	日本に来た直後の中国人留学生張さん、同じ研究室の同級生山田さん
概要	金曜日の午後、研究室に張さんは山田さんに食事を誘う。
言語行動・非言語行動	張さん：山田さん、後でご飯一緒に行かない？ 山田さん：今日は厳しいです。 . . . 張さん：そうなんですか。 . . .
結果	張さんは困惑してしまう。山田さんは本当に行けるかどうかかわからないです。

図5 表現の間接性（婉曲的な断り）の接触場面

3.3 言動を生起する過程のモデル

既存の異文化教材では対人行動の困難に関する日本人の考え方や原因などの提示法として、文章型の解説をよく用いている（表2）。関連研究より異文化教材の解説文は、専門性・難易度が高く、長い文章を用いた学習方法が不適切と指摘された[5]。

表2 既存教材による対人行動の困難の解説例

対人行動の困難	既存教材による解説例の抜粋
表現の間接性	日本では、 <u>古くから周りの人々に配慮し</u> 、自分は遠慮すること、 <u>相手の迷惑にならないように</u> 対立を避け、曖昧な表現を用いることが良しとされてき

	ました[9].
社会通念 における 上下関係	日本では年長者や目上の人を敬い、礼儀や言葉遣いに注意を払いながら人間関係を築く文化です。異なる文化背景の人とコミュニケーションを図る際には、相手の上下関係に対する意識を知っておくことも大切です[10].
集団行動	日本の社会では、人間関係を重視して、その集団の一員であることが大切にされてきました。周りの人に気配りをして、他の人と異なった行動をとることを極力避けて、みんなと同じように行動をすることで、社会に適応していこうとする日本人の行動の中に、このような日本的な価値観が見えてきます[9].

本研究では対人行動上の困難に関する解説から浮き彫りになった「人間関係」、「周りの人」、「相手」、「配慮」など言葉をキーワードとして、既存の日本人の対人関係・行動に関する研究の調査を行った。

濱口は既存の間柄はそれ自体値打ちのあるもので、利己的対処は望ましくないという「対人関係の本質視」を提示している[12]。さらに石黒によれば、日本人の対人行動では、「自分以外の存在への配慮」が重要とされている[13]。「自分以外の存在への配慮」とは、「(他者を)思いやること」、「他者への共感、同情心」、「状況への配慮、受け入れ」という意味が含まれる。つまり日本人の対人行動の特徴として、「他者への配慮」は良性的な人間関係を維持する大切なことである。

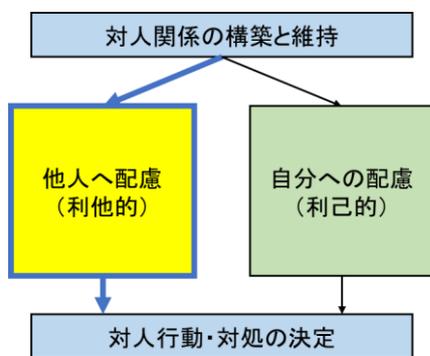


図 6 言動が生起する過程のモデル

従って、学習者に対人行動に関する日本人の考え方を理解させ、トラブルを回避する対策を理解させる提

示法を検討し、言動を生起する過程のモデルを提案する。図 6 における「対人関係の構築と維持」が対人行動の前提となり、それに基づく「自分への配慮」と「他人への配慮」両者を考慮し、実際に採用する対人行動を決定する。例えば表現の間接性（婉曲的なお断り）について、言動生起する過程を図 7 に示す。

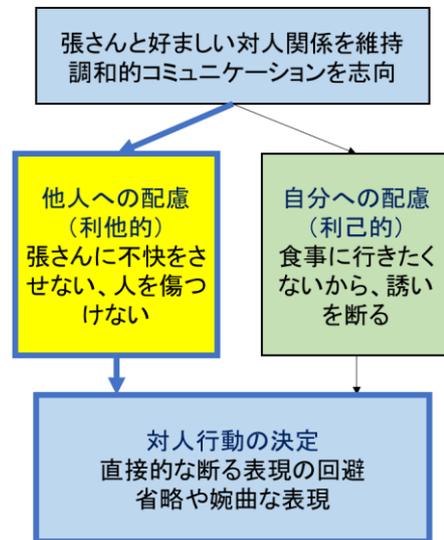


図 7 山田さんの言動を生起する過程

日本人の山田さんは食事に行きたくないの、中国人の張さんからの誘いを断りたい。もし自分のニーズだけを考慮すれば、張さんの誘いを直接的に断るのは相手の気分を害する可能性があり、それにより対人関係に悪影響を及ぼす可能性がある。そこで、相手を傷つけないよう自分の考えや気持ちを直接に言うことを避け、婉曲的・曖昧な言語表現を用いることが多い。

日本人は、まず対人関係を維持することを考え、好ましい関係を損ねるような行為を避け、他者との調和的な関係を維持するために、自分への配慮だけではなく、他人への配慮を重視した対人行動を行う。本研究はこのような一連の思考のプロセスを推論することで、言動が生起する過程のモデルを提案する。

3.4 GBS 理論に基づいた学習支援

異文化トラブルの疑似体験を実現するためにコンピューターベースの GBS 理論を利用する。GBS (Goal-Based Scenario)理論とは、R.C.Schank によって提唱された教授法である。GBS 理論は学習目標の達成を目的としたシナリオ型教材であり、「失敗すること」から学ぶ環境を作り出す学習支援方法である。GBS 理論に基づいた学習支援の特徴は以下のとおりである[13].

- ・与えられた情報を活用し、問題解決を目指す
- ・他の類似した場面での応用が利く
- ・問題が構造化されている場合に効果的である

GBS 理論は、学習目標、使命、カバーストーリー、役割、シナリオ操作、情報源、フィードバックの7つの要素で構成される (図 8)。



図 8 GBS 理論構成要素

GBS 教材では、学習者が目標を達成するために必要な関連知識を活用しながら問題を解決していく。この過程を GBS 理論ではシナリオ操作 (図 8 中央) と呼ぶ。GBS 理論は学習者に現実的に起こり得るような課題としての使命を明示する。カバーストーリーは使命を達成したいと思わせるような文脈設定としている (図 8 左中)。また、登場人物の役割 (図 8 左下) が指定されている。シナリオ操作における決断場面は、決断結果に応じて異なったフィードバック (図 8 右上) が用意されている。フィードバックは失敗から学ぶための情報を提供する。さらに、学習者は決断に必要な情報を情報源 (図 8 右下) から取得できる。

4. 学習支援システムの実装

4.1 GBS を用いた学習支援システムの実装

本研究の学習支援法では、接触場面の手法と GBS 理論を適用する。言動が生起する過程のモデルを用いて、日本人の対人行動上の考え方を把握しやすい表現形態で表わす。また、シナリオ内で学習した対人行動の対策が行使できることを学習者に確認させるため、学習支援システムの実装を行う。

日本人の言動が生起する過程モデルを用いることで、学習者は今回学習する異文化接触場面以外の場面でも対応できるようになる。評価の第一段として、本実験では、中国人留学生にとって理解が難しいと考えらえる5つの接触場面(「表現の間接性」における「婉曲的な断り」, 「社会通念」における「挨拶」, 「上下関係」, 「公共場所のマナー」, 「集団行動」における「集団へ

の同調」) を選択し、実験用学習システムを実装する。教材の汎用性を考慮し、ウェブにおいて利用可能である Flash コンテンツとして実装する。開発ツールは Adobe Flash CS6 を使用した。

4.2 学習システム的设计

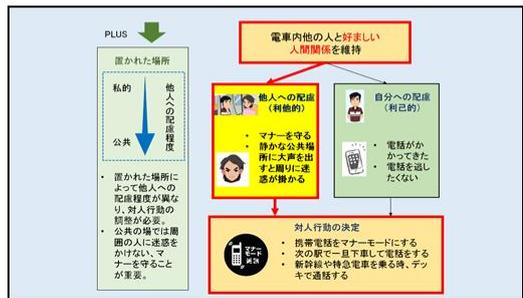


図 9 実際に作成した教材画面

各接触場面の学習内容に従い、GBS 理論におけるシナリオを構築する。構築方法は、接触場面の構成要素である参加者が GBS 理論の役割となり、参加者の言語行動・非言語行動と概要など情報が GBS 理論の構成要素であるカバーストーリーを形成する。本学習支援システムでは、参加者の会話や行動による異文化トラブルの状況を表示する。また、シナリオ操作における学習者が異文化トラブルに対しての選択式問題を提

示す。回答結果に応じてフィードバックが用意されている。実際に作成した教材の画面の一例を示す(図9)。

5. 評価実験の設計

評価実験では、構築した学習支援システムの有効性の評価と、問題点の確認と改善を目的とし、2017年12月に実施する。現在、日本で滞在1年間未満の筑波大学中国人留学生を対象に募集を行っている。参加者は30名(各学習教材×15名)を想定している。

参加者を、二つのグループに分ける。各グループに、提案システム用いた学習と比較教材を用いた学習をそれぞれ行ってもらい。“比較教材”として、以下の書籍における今回実験の学習項目と相当する内容を用いて教材を作成する。

1. 『異文化コミュニケーション・ワークブック』[9]
2. 『コミュニケーションガイドブック』[10]

学習の事前と事後に異文化トラブル対する“理解の度合いに関するテスト”を行い、その正答率の変化によって評価を行う。

学習する際、実験参加者は比較教材を見ながら、学習を進める。いずれの教材の学習時間も45分間とする。その後、教材別の学習の特徴、メリット・デメリットを把握し、学習効果の違いについて評価するために教材交換の体験学習を行う。また、学習後に評価アンケートを実施する。各グループ間で有意差が見られるか解析し、提案システムの評価を行う。実験全体は2時間とする。

6. まとめ

本研究の学習内容は中国人留学生が多くの問題を抱えている領域である対人関係に注目し、彼らが経験した具体的な異文化事例の調査を行って、中国人留学生にとって対人行動上の難しい場面を明確にした。

既存する異文化学習教材に比べ、理解しやすい学習内容と学習方法を提案するために、接触場面を用いた異文化学習とシナリオベースのGBS理論を同時に利用し、異文化接触環境を作り出した。また、言動が生起する過程のモデルを用いることで日本人の対人行動上の考え方を把握しやすい表示方法を提案した。

今後は、学習支援システムの実装を完成し、実際の利用を想定した実践的な評価における学習支援法の有効性と改善点の確認のための評価を行う。

参考文献

- (1) 独立行政法人日本学生支援機構(JASSO):“平成28年度外国人留学生在籍状況調査結果”, (2017)
- (2) 村田雅之:“留学生の「適応に要する時間」に関する分析”, 飯山論叢, 11(2), pp.88-105, (1994)
- (3) 陳金, 高田谷久美子:“在日中国人留学生の勉学・生活におけるソーシャルサポートの特徴とその効果”, 山梨大学看護学会誌, 第6巻, 第2号, pp.88-105, (2008)
- (4) 山岸みどり:“異文化能力とその育成 異文化接触の心理学”, 渡辺文夫編著(川島書房), pp.17-24, (1995)
- (5) 加藤優子:“ICTを用いた異文化トレーニングの基礎的研究”, 仁愛大学紀要人間学部篇, 第9巻, pp.1-9, (2010)
- (6) 田中共子:“在日留学生の異文化適応:ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の視点から”, 教育心理学年報, Vol. 37, pp.143-152 (1998)
- (7) 赤羽優子:“日本語非母語話者の日本語接触場面における心理面の調節”, 計量国語学会, 第29巻, 第5号, pp.131-153 (2014)
- (8) 横林宙世, 羅明坤:“日本異文化接触場面における意識調査-中国人大学生の場合”, 西南女学院大学紀要, 14, pp.147-163 (2010)
- (9) 八代京子, 荒木晶子:“異文化コミュニケーション・ワークブック”, 三修社 (2001)
- (10) 異文化コミュニケーション研究所:“コミュニケーションガイドブック”, 神田外語大学 (2005)
- (11) 濱口恵俊:“間人主義の社会日本”, 東洋経済新報社 (1982)
- (12) 石黒武人:“多文化関係と異文化コミュニケーションの可能性—『察し』に内蔵された肯定的側面”, 多文化関係学, 3, pp.151-160 (2006)
- (13) 根元, 朴, 北村, 鈴木:“問題解決型学習デザインの研究動向”, 日本教育工学会研究報告集, pp.151-158 (2010)